



社会福祉法人中央有鄰学院 広報誌

# となりにいるよ vol.43



2026.04

vol. 43



## こどもまんなか社会実現と中央有鄰学院の役割

理事長 那須野 康成



令和七年度関係者の皆様にはご支援ご協力を賜り厚く感謝を申し上げます

さて、現代社会は、少子化や核家族化、地域のつながりの希薄さなどが問題視されています。こどもに目を向けると児童虐待・不登校・ひきこもり・自死などさまざまな問題が存在しています。政府は、その中ですべてのこども達が「幸せを実感」する社会実現のためには、家庭での子育て支援を中心に地域全体でこどもを支えることが重要であるとの考えから、令和五年度「こどもまんなか社会の実現」を打ち出しました。今回はこの施策と中央有鄰学院の役割について述べたいと思います。

今まで、子どもを取り巻く様々な国の政策は各省庁で練られていましたが、縦割りのためその支援がバラバラになっていました。例えば、青少年の健全な育成及び子どもの貧困対策は内閣府政策統括官。少子化対策及び子ども・子育て支援は内閣府子ども・子育て本部。犯罪から子どもを守る取組は内閣官房。児童虐待防止対策は厚生労働省。児童の性的搾取対策は国家公安委員会・警察庁などが支流でした。

そこで政府は、これらの施策を一本化し推進するために、「子ども若者の権利の保障と最善の利益を最優先に考える社会」の実現のため「こども家庭庁設立（2023/4）」と「こども基本法」を成立させました。また、こども施策を総合的に推進するための大綱「こども大綱方針（2023/5）」を閣議決定しました。

こども家庭庁は「こども基本法」で社会的養護児童対策は公的責任で社会的に保護養育し、養育に困難を抱える家庭への支援を行くことを目的し、児童は虐待分離体験などによる悪影響からの回復を目指し、専門的ケアや心理的ケアにより安心感を持てる場所で大切にされる体験を積み重ね、信頼関係や自己肯定感を取り戻すことを目的とすると謳っています。

中央有鄰学院はこの対策の具現化に向け、新たな取り組みを積極的に行って参りました。児童養護施設においては①小規模児童養護施設設置を六棟②自立援助ホーム等の設置を三棟③地域子ども食堂の運営などを実現してきました。乳児院では、丁寧な乳児保育の他①里親支援センターの運営②妊産婦等生活援助事業の実施など子育て支援に向け幅広く地域に根差した児童対策を行っています。

しかし、これらの実現は職員間の熱意と連帯感、地域関係機関との連携なしには実現できません。今後も、国や名古屋市の施策を注視し、社会福祉法人中央有鄰学院の役割として、「こどもまんなか社会の実現」とこども自身が「幸せを実感」できるよう努力して参ります。

令和八年度関係者の皆様におかれましては引き続きご支援ご協力の程よろしくお願い申し上げます。



## 子どもの言葉に耳をすませて

～当たり前を問い直す日々～

ゆうりんでは2017年に初めて地域小規模児童養護施設が開設され、2025年までに5軒になりました。そして2026年2月、6軒目の地域小規模が開設されました。気付けば13年、私が担当しているお部屋の子とも達が、ようやくお引越しとなりました。地域小規模が新しく出来る度に、子ども達からはいつも「いいな」「次は私たちでしょ？」といった声が上がっていました。その中には「“普通”の家から学校に行きたい」という声もありました。要するに、“ただの”一軒家に憧れていたのです。大きな門も無い、広い中庭も無い、駐車場裏のバスケットゴールも遊び道具がいっぱい入っている倉庫も無い、ただの一軒家です。子ども達の声には、私自身も共感していたつもりでした。

しかしある日、「門から登校する自分の姿を、同級生に見られたくないんだよね」と子どもから聞いた時には、ハッとしました。当たり前だと思っていた日常の風景でしたが、こんな風に考えていたのか、と。そんな話をしていると、また別の子が「ゆうりんのことを友達に話したら、めっちゃ金持ちやん！って言われたから自慢した」と冗談交じりに笑って言いました。“ゆうりん”とは言わず、ただ「うちには大きな門と、広い中庭がある」と話したそうです。そう考えることも出来るのかあ、と感心しました。子どもの言葉に耳を傾けていると、“改めて気付く”ことばかりです。13年経った今でも、そんな毎日なのです。それは子どもたちが、上記のように日々色々な事を考えながら成長しているのかなと感じます。



## 児童養護施設

# ゆうりん

地域小規模児童養護施設

かえて・けやき・あおい・ゆう・のぞみ・こはる



だからこそ、私達も日々色々な事に気付かされるのです。

そして、いよいよ引っ越し間近となった時。なんと子どもから、「引っ越したくないかも～」との声。徒歩5分とはいえ、住み慣れた場所から離れることに、急に不安を感じ始めたのです。引っ越しが楽しみだばかり思っていた私は「不安もあったのか…！」と、またもやここで気付かされました。そうは言いつつも「新しい部屋はこんな風になりたい」と子どもが自分で配置を考えたり、家具を選んだり。楽しみ半分、不安半分。環境が変わるのですから、当然です。

私たちは、こうした日々の子どもの些細な言葉に出来るだけ耳を傾け、どうしたらより良い暮らしになるかを考え続けています。それでも100%は叶えられないし、あの時こうしていたらこうだったのかな、と後悔することも、胸が引き裂かれるような瞬間に出会うことも、沢山あります。それでも、子どもの笑っている姿を見ると「今はこれでいっか」と思えて、一緒になって笑います。子ども達もよく、「こうすれば良かった。そしたらこうだったのに」と言います。どの道を選んだら後悔しないかではなく、どの道を選んだとしても「ま、これはこれでいっか」と前向きに笑って過ごせる、そんな大人になって欲しいな、と願っています。いつかは、「これで良かったんだ」と思える日が来ることを信じて。(野村)

# 自立援助ホーム きょうわ

## 思い出いっぱいのきょうわから新しい一歩

自立援助ホームきょうわは、2012年に大府市共和町で開所し、2018年に現在の場所である名古屋市緑区に移転し、今年2026年に再度移転します。

現在のきょうわは、一軒家を改修した建物ですが、新しいきょうわは、居室がわかれているアパートタイプとなります。時折、入所者を連れて建設中の新きょうわを見に行っていますが、今までとは生活の仕方がガラリと変わるので、気持ちとしては期待半分・不安半分といったところでしょうか。

現在のきょうわには、これまで関わってきた職員・入所者たくさんさんの思い出が詰まっています。駐輪場でBBQをしたり、



新しく建築中の新きょうわ

駐車場で花火大会をしたり、リビングで流しそうめんをしたり…。入所者に縄跳びやバドミントンに付き合ってもらいたいと誘われて中庭や駐車場で一緒に遊んだこともありました。

きょうわの大家さんには、とてもお世話になっており、上記のイベントの際にご挨拶をすると、「楽しそうだね、大丈夫だよ」と快く許可を出してくださっていました。また、普段から野菜や果物をいただく機会も多く、きょうわの食事の材料として入所者に提供しておりました。この場をお借りして篤くお礼申し上げます。

思い出の詰まったきょうわからの引っ越しがそろそろ始まっています。どのような雰囲気になっていくのか楽しみです。ね。(新村)

## 児童自立生活援助事業 ゆうりんⅡ型

### 希望を抱いて、それぞれの再スタートへ

児童自立生活援助事業「ゆうりんⅡ型」を開設して2年が経とうとしています。この春2名の利用者が独り立ちしていきました。利用者Aさんからは「Ⅱ型の職員さんのおかげで生活を立て直せました。毎日のご飯もおいしかったです。」との言葉を頂きました。またBさんは今年度20歳を迎えたのを機に、家族と数年ぶりに連絡を取り再会を果たし、子どもの頃には言えなかった思いを伝えることができ、よかったと話していました。Ⅱ型を利用し始めたころは日々の生活で精いっぱいだった2人ですが、本人の力を信じつなかり続けることができたからこそ、希望を抱いて再スタートが切れたのではないのでしょうか。

今年度4月には2か所目の児童自立生活援助事業Ⅱ型である「大高ベース」を開設しました。困難を抱える若者は非常に多く、ニーズの高さを感じています。これからもあたたかい手作りご飯と「となりにいるよ」の姿勢で利用者の安心を支えていきたいです。(ホーム長 安藤)



「大高ベース」アパート完成予想図



## 地域食堂 もりカフェ

笑顔がつながるみんなの居場所



地域食堂「もりカフェ」の活動が始まって、まもなく丸3年を迎えます。今では、常連の子どもたちや親子の皆さんとスタッフもすっかり顔なじみになりました。一緒に遊んだり、学校の話や聞いた話、何気ない世間話で笑い合ったり。「ちょっと聞いてほしくて…」と、ぼつりと悩みを話してくれることもあります。そんなやりとりが当たり前になりました。栄養満点で温かい食事を囲みながら、子どもも大人も安心して過ごせる時間を大切にしています。何気ない関わりの中で、子育てや生活の困りごとに気づき、一人で抱え込まずにすむよう、そっと寄り添う姿勢を心がけています。

私がもりカフェの活動に携わり始めたのは、令和5年10月でした。当時はまだ立ち上げ期で、栄養士・心理士・ケアワーカーが連携しながら、試行錯誤を重ねていました。「どんなメニューが喜ばれるだろうか」「どうしたら、ほんとに安心できる場所になるだろうか」。少しずつ形にしながら、毎週の活動を積み重ねています。子どもたちや親子、若者、高齢者…誰もが気軽に立ち寄れて安心できる場所として、これからも地域の中に根づいていきたいです。

実は私自身も「居場所」を探していた一人です。妊娠・出産をコロナ禍で経験し、外出もままならない中、産後すぐの一番大変な時期に、どこを頼ればよいのか分からず、不安な日々を過ごしていました。だからこそ今、もりカフェが誰かにとっての安心できる場所であってほしいと願っています。そして何より、私自身も毎週の活動をとっても楽しみにしています。地域の皆さんの笑顔や何気ない会話に元気をもらいながら、気がつけば私もこの場所に支えられています。もりカフェは、私にとっても大切な「居場所」の一つです。(柴田)

## ゆうりん事業展開の過程

ゆうりん施設長 小尾康友

私が、児童養護施設で働き始めて21年経ちました。入職当時は、19名の職員で、63名の子どものお世話をしていました。振り返ると、時代背景もあり、現在のように権利を考え、子どもの最善の利益へ向かっているとは言い難い状態でした。

その中で、①子どもたちが「施設だから」と一般家庭であたり前のように出来ることを諦めないように、②暴力暴言がなく、安心して暮らせるようにと願い、子どもと日々を紡ぎ働いてきました。

①子どもたちがやりたいことができるようになるには、当たり前ですが、子どもがやりたいことを話せる環境が必要です。その次に、職員はその声を聴き、安全を守りながら実行できる方法と、予算をどう捻出するのか考えます。そのやり取りを積み重ねた結果、現在は、2軒の家で犬を飼っていて、退所者含めて4名程がアパートで一人暮らしをしており、今年3月に海外留学に行くまでに至りました。

②子どもたちが安心して暮らすためには、職員が長く続けることは不可欠です。しかし、現場で私より経験年数が高い職員は、7年目の時に一人もいなくなりました。子どもの環境を良くすることと合わせて、職員の職場環境を良くする必要があります。そのために、事業を増やしていきました。この6年間で、地域小規模が5カ所増、自立生活援助事業Ⅱ型、地域食堂もりカフェと事業が増えました。

「事業が増えると大変でしょ」と言われます。もちろん大変な部分もありますが、「子どもの安全（権利）」「職員の職場環境（自己効力感）」を考えると、増える度に、より良くなっていると感じます。初めは単独で進めていた事業展開も、今ではチームで進められるようになりました。これらを職員、子ども皆で分かち合うことで、さらなる事業展開と、主体的な生活と働き方が進むと感じます。

事業が増えた結果、職員の数も、子ども51名に対して、57名となり、私が働き始めてから38人も増えました！他にも、実践発表の機会（当事者含む）や、休みの数、有給取得が増えて、ストレスチェックも標準よりかなり低い結果でした。

今後も、目の前の困っている子育て世帯の「とりにいる」存在となれるように、子どもたちが実家のように帰ってこられるように、「子どもの権利」「子どもの最善の利益」「職員の職場環境」のバランスを皆で考えながら進む組織であり続けたいと思います。





## 「食べるって楽しい！」を一生の宝物に

ほだかでは食育に力を入れています。「食育」というと、子どもと一緒に料理をする、野菜について勉強する、など、“今から食育の時間”として、栄養士が中心となって取り組むイメージが強いと思います。ですが、ほだかでは、子どもにとって食が身近なもの・楽しいものになることを目標に、「日常生活の中に食育を取り入れること」「子どもに手伝いを促さないこと」「ユニット職員と厨房職員が連携して行うこと」を大切にして食育に取り組んでいます。

以前は乳児院とは別の建物にある厨房ですべて調理していましたが、現在では1日1回以上、子どもたちが生活するユニットにあるキッチンで、厨房職員だけではなくユニット職員も食事を作っています。キッチンで食事を作っていると、外で遊んで帰ってきた子どもと職員が「いい匂いするね。今日のご飯なんだろうね。」と話していたり、「今日のご飯何?」「ちょうだい!」とキッチンに味見に来たりする子もいて、苦手な食べ物も味見なら食べられる子もいます。匂いでメニューを想像する、味見の特別感で苦手な食べ物に挑戦するなど、お手伝いをしなくてもそれだけで十分な食育になります。また、子どもは大人の食事を作る様子をよく見ていて、おままごとで真似をしていることもあります。

他にも子どもとスーパーへ行って、おやつのお菓子を自分で選んだり、食事の材料を購入したりする取り組みもしています。買い物に行って食べたいものを選ぶ、買って来たもので食事を作る、という家庭では当たり前のことでも、施設では意識して取り入れないと経験できないことです。乳児院にいる期間は年齢的に記憶に残りづらい時期かもしれませんが、今の関わりが将来に繋がるという意識の下で、いつか子どもたちが自立したときに、少しでも役に立ってもらえたらと思っています。

そして、何よりも子どもと一緒に職員も食事を楽しむことで、ほだかの子どもたちにとって食べるのが楽しい記憶になってくれたらと思います。(伊藤)





## 妊産婦等生活援助事業 あん



### 「あん」がつなぐ、新しい命への願いと日々の暮らし

妊産婦等生活援助事業あんがスタートして4か月が経ちました。まだまだ手探りではありますが、予期せぬ妊娠で悩む女性の相談や出産を控えた女性のサポートに励む日々を送っています。夕方になると職員がキッチンに立ち、夕食を作ります。そして、利用者さんと職員が一緒におしゃべりしながら出来上がった温かいご飯を食べます。楽しい雰囲気の仕事場面であっても、さまざまな出来事を経てあんに繋がった妊婦さん（お腹の赤ちゃんも）同士が食卓を囲んでいることについて、職員には、ほっと安心するような、でも少し胸が詰まるような、いろいろな思いが湧き上がってきました。それでも、ここに来てもらえて良かったな、元気な赤ちゃんが生まれてくるといいな、とやっぱりそう思います。

あんで大切にしていることは、法人の理念である「となりにいるよ」です。利用者さんがあんで生活を送る期間は長くはありませんが、一つ一つの出会いを大切に、利用者さんの毎日を丁寧に紡いでいくお手伝いをしていきたいです。（統括責任者 北根）



## 里親支援センター ほだかの里

### 開所1年を迎えて ～地域とともに広がる支援～

昨年、新たに再スタートを切った『ほだかの里』も早いもので開所1年が過ぎました。この1年で新たに、研修や高齢児向けの企画、レスパイトの受付調整、自立に向かう子どもたちへの支援など多岐に渡り、新しいことにも意欲的に取り組んでいます。

今では名古屋市全域から多くの里親家庭の皆さんが来所して下さるようになりました。一方で、遠くにお住いの方からは「もう少し近ければいいのに。」といった声も聞こえてきています。

里親家庭は地域の中にあり、またそこで暮らす子どもたちも地域の中で育っていきます。『ほだかの里』へ来所して下さる方が増えることはもちろん嬉しいことですが、地域の資源を活用しながら地域の中で里親家庭の皆さんが暮らしやすい環境をコーディネートしていくことも里親支援センターの大事な役割のひとつだと考えています。

今後は各地域ごとの啓発活動の強化や子育てに関わる関連機関との連携なども目指しながら、個々の里親家庭に寄り添った支援の出来る里親支援センターを目指し、これからも変化し続けていきます。この緑区大高地区から少しずつ里親支援の輪が繋がりを、名古屋市全域に広がっていくよう、微力ながら地域の一端を担っていければと思います。

（センター長 竹田）





## 名古屋市地域子育て支援拠点 ふれあいセンターおおだか

### ひとりじゃないよ、みんなで子育て

令和7年度も、多くの親子連れの皆様にご利用いただきました。近年は育児休業中に利用される方も増えております。初めて来室される方の中には、「支援センターのことを知らなかった」という方や、生後2ヶ月ほどのお子様を抱いて、緊張した様子で訪れる方もいらっしゃいます。



「一人でいると、子どもとどう接すればいいのかわからない」という不安の声を聞くことも少なくありません。身近に相談相手がおらず、孤独や不安を抱えながら子育てをしている方は多いと感じています。私たちは、そんな不安を抱えるお母さんの声に耳を傾け、少しでも心が軽くなるよう、行事やママ講座へのご案内などを通じて「一人にしない支援」を大切にしています。

何度も通ううちに、お子さんを通じて親同士の会話が生まれ、新しい繋がりが広がっていきます。一人でも多くの方がセンターを頼り、足を運んでいただけるよう、これからも「いつでも、誰でも楽しめる場所」であり続けたいと思います。新年度も新たな気持ちで、皆様をお待ちしております。(丹羽)



### 厨房だより 笑顔あふれるおせち作り



年末年始には、いつもより少し豪華な食事が食卓を彩ります。その中でも、ゆうりんで昔から大切に受け継がれているのが「おせち料理」です。子どもたちに人気の栗きんとんや伊達巻、紅白なますなどを、ひとつひとつ丁寧に作っています。食事の際には、それぞれの料理に込められた意味も伝え、季節ごとの行事に触れる機会としています。例年は厨房職員が中心となって作っていますが、今年度は「おせち料理を作りたい」という子どもたちを募り、職員と一緒に調理に挑戦しました。

包丁を使って大根やにんじんを丁寧に千切りする子、栗きんとん用のさつまいもを一生懸命裏ごしする子など、どの子も真剣な表情で取り組み、とても上手に仕上げていました。完成したおせち料理を少しつまみ食いするのも、作った人ならではの楽しみです。こうした体験を通して、食べ物への感謝や作ることへの喜びを感じてもらうことも、大切な食育の一つだと考えています。これからも、季節の行事を子どもたちに伝えながら、食育につながる取り組みを続けていきたいと思っています。(中村)



### 法人事務局 出会い ～前理事長 植田さんの言葉～

私は学生時代某新聞社の厚生事業団でキャンプに関わっていた。そんな繋がりで学童保育クラブからキャンプの手伝いの依頼があり、三重県のとあるキャンプ場が彼との最初の出逢いであった。その夜「自由とは何か」「自律とは何か」等々深夜まで語り合った事を今でも覚えている。

私が社会人になってからも時々彼とは縄暖簾をくぐり、現況報告をしあっていた。数年彼からのお誘いがなかったのだが、ある日突然彼が私の職場に訪れ「保育園と老人ホームの合築を考えている」と何も書かれていない模造紙を広げたのだった。「どの様な部屋がいい」「どんな生活空間がいい」「職員採用は・・・」と楽しそうに語る彼がいた。2年後施設は完成に近づいていたのだが施設運営に関わってほしいとの彼の言葉で彼とは初めて5年間仕事をする事となった。しかし、仕事上での意見の違いは数知れず、いつも激論を交わしており周囲の職員からは「仲が悪いのですか」と言われていた。

介護保険制度が始まる事を言い訳に彼は職場を去ったのだが、その後彼が児童養護施設を運営する社会福祉法人中央有鄰学院に移った事を知った。そんな彼から連絡が入り「話がある」とのことで久しぶりに縄暖簾をくぐったのだった。「お前中央有鄰に来ないか」との誘いで始まったのだが、酒が進みほろ酔い加減の彼の言葉を思い出す。「社会福祉法人が措置制度下で、安定した施設運営が出来るようになったが、その制度の上にあぐらをかいてるように思う。社会福祉法人として何が出来るかではなく、何をするのか自ら道を切り開く事をしなくなってしまったのではないか」

彼が亡くなり、もう1年が過ぎた。彼と出会って半世紀にも及ぶ酒宴の席ももう開くことはできない。数々の宿題を頂いてきたが、手持ち時間が少なくなった私は彼の「社会福祉法人としてすべきこと」を次の世代に繋いで行くことが彼からの最後の宿題なのだろうと考えている。(常務理事 児玉)





## 「夢中になれるもの応援プロジェクト」で 韓国留学を実現しました。

昨年度、多額のご寄付をいただき、「夢中になれるもの応援プロジェクト」を立ち上げました。本プロジェクトは、公的な措置費だけでは実現が困難だった子どもたちの挑戦を後押しする取り組みです。厳正な書類選考と面接を経て、このたび、ゆうりんのMさんが韓国留学を実現しました。

### ゆうりんにいるからこそできるんだよ ～Mさんの韓国留学体験記～

私の韓国への想いは、小学校低学年の頃に初めて韓国ドラマを見た時から始まりました。その魅力にすっかり引き込まれ、学校から帰ると毎日のようにドラマを見るようになり、K-POPにも夢中になりました。高学年になると、ドラマを一時停止してはメモを取り、覚えての単語を独り言で使い始め、大好きなチマチョゴリも手に入れました。中学に入ってから「字幕なしでドラマを見たい」という目標ができ、単語本やフレーズ本を朝も放課後も肌身離さず読んで暗記しました。学習アプリで文字を覚え、韓国語が上手な中国の方と出会ったことで、今度は日本語が通じない場所で、現地の人たちと自分の言葉で話してみたいと強く思うようになりました。中学3年生では韓国語で紹介動画を撮ったり物語を読んだり、少しずつ言葉が自分のものになっていくのを感じていました。

私が留学を決めたのは、現地の文化に直接触れたい、現地の人と直接会話したい、そして何より海外に行くことで視野を広げたいという強い気持ちがあったからです。自分の人生が「ゆうりにいたから」という理由で何かができないのではなく、「ゆうりにいてもできるんだよ、いるからこそできるんだよ」ということを、自分自身の経験を通して伝えたかったです。小学校の頃からの夢を叶える一歩を踏み出し、自分に自信を持ちたい。そんな思いで韓国へ向かいました。



現地の語学学校では、ハイテンションで面白い先生や世界中から来たクラスメイトに出会い、韓国だけでなく様々な国の文化に触れることができました。留学前は書くことが苦手でしたが、授業を通してテストで100点を取り続けるくらい上達して、授業中も積極的に発言できるようになりました。クラスで一番年下だったこともあって、みんなからとても可愛がってもらえたことも嬉しかったです。ホームステイ先では、優しいホストマザーが家庭料理でもてなしてくれて、家を訪ねてくる世界中の人たちと交流する毎日を過ごしました。

学校以外の時間は、一人で地下鉄を調べてロケ地や図書館へ出かけたり、様々な国の友達と街を歩いたりしました。活気ある屋台や賑やかな街並み、おしゃれな空間、そしてパン屋さんのパンが驚くほど美味しかったことがとても心に残っています。空港でのトラブルを自力で乗り越えたことは、私のメンタルを強くしてくれました。日本語が全く通じない環境はとても新鮮で、現地の人たちの陽気でハキハキとした話し方に触れるうちに、私自身もどんどん前向きに変わっていくのを感じました。自分の韓国語が通じて、現地の人とスムーズにやり取りができたことや、「かわいい」「賢い」と褒めてもらったことは、大きな自信に繋がりました。日本に帰りたくないと感じるほど充実した韓国留学は、国際交流の楽しさと自分の成長を強く実感したものになりました。



# 中央有鄰学院職員紹介

## ゆうりん 中島 琴音

### 一日一日を大切に。子どもたちと紡ぐ「楽しい日々」

4月で入社してからもうすぐで1年が経ちます。お部屋に入った当初は子ども達との関わり方に悩むこともあり、挫けそうになることもたくさんありました。どこまでなら許容してくれるかと試されることも多々あり、葛藤する日々でした。自分なりのコミュニケーションの取り方・関わり方で徐々に関係もでき、今では楽しい毎日をご過ごしています。始めは苦手だったご飯作りも今では子どもたちに喜んでもらえるお弁当が作れるようになりました。卵焼きを可愛くしたり、クリスマス時期にはクリスマスっぽいお弁当を作ったりしたことで「こっちゃんのお弁当かわいいしおいしい！」と喜んでもらえるようになりました。作る時間もだんだん早くなり、無理なく楽しんでお弁当を作ることが出来ています。寝かし付けも徐々に呼んでくれる回数が増え、「今日はこっちゃんね」「寝かしつけ楽しい」と言ってくれることがとてもうれしかったのを覚えています。



私はアルバイトで、もりカフェにも参加していました。週に1度会う地域の子もたちと仲良くなっていけるのが楽しかったです。積極的に声をかけることで子どもたちの様子を知り、子どもの方から相談されることが増え、やりがいを感じていました。現在はたまにお手伝いに行っていますが、会うと「あ！」と気づいてくれたり「久しぶりー」と声をかけてくれたりするのがとてもうれしいです。週に1度と少ない中での関わり方は難しく感じることもありましたが地域の子もたちと関わるととてもいい機会だなと実感しています。入所児童だけでなく、地域にいる子どもたちとも関わっていけるのがゆうりんの良さだと感じます。

まだまだ自分に出来ることは少ないですが一日一日を大切に子どもたちと楽しい日々を過ごしていきたいと思っています。

## ほだか 御村 梨奈

### 18歳の大きな決断から始まった、夢の続き



私が乳児院で働こうと思ったきっかけは、福祉科の高校で保育、看護、介護の実習をし保育が一番楽しく、「やりたい！」と思ったからです。その後授業を受けていく中で、「乳児院」という施設があること知りました。小舎から大舎まで様々な施設があり、その中でも小舎でこどもと一対一で関わる事ができるところで働きたいと思うようになりました。専門学校へ進学する際にあたり、大きな決断をしました。それは生まれ育った三重県を離れ、愛知県で生活する事でした。

昔から漠然と「一人暮らしがしたい」という思いだけはありましたが、具体的には何も決まっていませんでした。しかし、これを機に愛知県の専門学校で保育についてより学びたいと思い、18歳で名古屋での一人暮らしを始めました。専門学校で就職の話になった時には、先生に「乳児院から募集が来たら教えてください」とだけ伝え、そこで一番初めに募集が掛かったのが「中央有鄰学院」でした。そこからはあっという間に月日が経ち、今こうして高校生からの夢であった小舎の乳児院で働くことができています。

入社して3年目になりますが、こどもたちの笑顔はいつ見ても癒されます。まだ喋れないこどもたちが全力で怒りを表現している姿さえも、かわいいなと思います。現在担当している7カ月の男児は後追いが始まり、どこにいてもずりばいで一生懸命追いかけてくる姿は、とても愛おしいです。

プライベートでは、同期や友人と旅行に行ったり、自然いっぱいのところに行ったりと出かけることが多いです。愛知県にきてもう6年経ちますが、まだ知らないところがたくさんあり日々楽しんでます。最近のおすすめスポットは田原市にある「日出の石門」です。これからも多くの事を学んでいき、大好きなこどもたちの成長を一番近くで見守っていきたいなと思います。

# 中央有鄰学院との出会い、そして今

ほだかの里 神谷 賢次



中央有鄰学院と初めて出会ったのは、今から20年以上前のこと。当時、私は児童相談所の児童福祉司として、担当する子どもに会うためにこの地を訪れました。古びた建物の外壁に描かれた大きな壁画が、どこか周囲とミスマッチに感じられたことを今でも鮮明に覚えています。

当時の学院はいわゆる「大舎制」で、他の施設と同様に子どもたちの間にも激しい葛藤がある「荒れた時代」でした。中学生男子の措置変更や、姉弟のルーツ探しに奔走した日々。苦勞の絶えない時代背景の中で向き合った子どもたちの姿が、私の記憶に深く刻まれています。

その後、私自身が現場を離れている間に、学院は大きな変革を遂げました。建物は建て替えられ、家庭的な「小舎制」へと移行。乳児院も新設され、職員体制も一新されました。

児童相談所を定年退職した後、里親担当の非常勤職員として久しぶりに学院を訪れた際、かつての面影がないほどに温かくなった施設の雰囲気に「全く別の場所に来たようだ」と驚きを隠せませんでした。その後、ケースカンファレンスや里親実習などで足を運ぶ機会が増えましたが、まさか将来、自分がこの法人の一員として働くことになるとは、当時は想像すらしていませんでした。

転機は令和3年。名古屋市初の民間フォスティング機関（現里親支援センター）開設の動きの中、当時の乳児院ほだかの施設長から「一緒にやってほしい」と声をかけていただきました。公務員一筋だった自分に民間での仕事が務まるのか、60代後半という年齢で体力や気力が続くのか。不安は尽きませんでしたが、「一度、外側から客観的に児童相談所と関わってみたい」という好奇心が背中を押ししました。

しかし、いざ「里親家庭支援センターほだかの里」としてスタートした1年目は、まさに暗中模索。自分の役割であるはずの児相との連携すらままならず、自信を失いかけたこともありましたが、新たに「里親ガイダンス」を始めたこと等がきっかけとなり、児童相談所とのつながりや信頼関係を少しずつ構築していったような気がしています。

現在、ほだかの里の活動は相談・マッチング支援にとどまらず、居場所づくり・交流のためのカフェやワークショップ・サロン、各種研修、ガイダンス、啓発活動、里子支援など多岐にわたる業務を展開するまでになりました。スタッフの数も当初の3倍近くに増え、名古屋市の里親支援の中核を担う存在へと成長しました。

「連携の道筋をつけたら身を引こう」と考えていたはずが、気づけば5年目。温かい人間関係と、自分が望んだ仕事に没頭できる環境に、いつしか心からの心地よさを感じている自分があります。

初めての出会いから20年余り。険しい時代を知っているからこそ、今ここにある穏やかな繋がりに感謝せずにはいられません。「ここに来られてよかった」——。その実感を胸に、これからも里親家庭と子どもたちのために歩んでいきたいと思っています。



## ご支援ありがとうございました

令和7年9月1日から令和8年3月31日までに、寄付・寄贈・招待・ボランティア活動にご協力いただきました方々のご紹介をさせていただきます。紙面の都合上内容は省略させていただきます。（順不同・敬称略）

### 【個人】

池上みつこ 柳谷真智子 佐藤孝介 伴俊明、直美 川瀬康平 中山美穂 塘祐裕 伊澤幸一 小野哲郎 山口ミツノ 川北 正木裕子 川崎和代 宇都耕士 ふくもり 鈴木柚香 崎山智子 永吉利恵 山本ゆき 吉田志保 ふくしま 横田奈千 服部結花 糀山りこ 山口裕 中井良男 齋藤智 春田 細井友美 酒井由香 中村 増田公美 田中友里子 山下美紗樹 山口保 永吉利恵 犬飼奈央 小塚滉斗 浜島よし子 山本ゆき 榎本卓純 早川富雄 山村恵美 中村美樹 小山明子 川瀬喜世美 寺尾朋美 ジェイムスヘイブンス 小島啓 吉長敦子 里中麻理子 小川康一郎 西尾可愛 加藤美樹 友 金田和久 谷本美枝子 村知梨紗 近藤美恵子 サンタクロース 長谷川 熊谷 若松理恵 近藤朋美 棚橋俊幸 本田和也 西垣 三輪将太郎 松尾光子 千葉賢哉 平間友也 門司一徹 相見 渡辺桐名 金子 鈴木江莉伽 小杉裕子 広瀬幸子 ねこ 江口卓宏 長谷川由子 山田佳世乃 ふじさき 中井良男 おばちゃん 加藤美和 松山信 竹田綾花 河野綾子 村瀬光行 矢守信昭 柴橋佳幸 伊藤吟子 山見由紀子 紙屋裕安 梶野弘 真木芳子 石井祐治 西島安珠 森政樹 長江謙二 長江真克 佐伯誠 川辺清次 鈴木勝 林田社介・真子 松永勲 堀川道子 河西ヒロ子・知子 町野芳恵 鈴木亨 竹田登志也 後藤雪江 上村優子 伊藤壽重 人見訓聡 齋藤智 小川康元 宗吉美雪 一杉治夫 早川久代 毛受小夜子 近藤加代子 杉浦孝一 水野友美 紙屋祝子 山岸せい子 山口浩導 奥野知秀 秋元浩元 山口諒真 齋藤礼子 中島光利 花井正紀 山口実 土居万里子 小野田隆司 朝倉建子 小田義信 羽賀淑子 伊藤富雄 河原木英子 伊藤一樹 伊藤侑依 宗次徳二 池島由紀子 千葉厚子 余語宗紀 熊谷君子 福岡由喜子 花井淑晃 森山陽介 鋤柄江美 吉住隆弘 江口卓宏 松井真由 鷺見千尋 山口知加 匿名

### 【団体】

尾州商会 tsumugu sewing room 光ネットワーク協同組合 名古屋食糧 なごや子ども応援委員会 ファミリーマートフードドライブ エコトレーディング小牧 チュチュアンナ フレーベル館 経理チーム マイカーズズキ トナミホールディングス松寿会 エスティケー セブンイレブン名古屋大高南店 フィリップモリスジャパン セブンイレブンジャパン ボラみみ アクサ生命 名古屋海上保安庁 コカ・コーラボトラーズジャパン 地域の応援係 日本レコード協会 ファーストリテイリング 更生保護女性会 名古屋銀行 名古屋市 むすびえ ゆうちょ銀行 ネオアーク ミライプロジェクト 全国シャンメリー協同組合 JAあいち ヒルズワーク 徳重ガーデンズ 名古屋食肉三水会協同組合 明治安田熱田営業所 ソロピッツァチェザリ オールドリバー 日本鏡餅組合 みらいホールディングス ブライドトゥービー 英語学習コミュニティEIAプレリードッグ南大阪ジスティクスセンター 一歩の会 小島歯科医院 南大高町内会 緑区社会福祉協議会 CBCチャリティー募金 こーたりーな meito FRAGRANCY ウッディチキン ユウシン ワイドワン 木曾路 ワイグループ ユーエージェント 日本ベビーサイン協会 フジトランスコーポレーション K&M不動産 大高北区女性会 緑鯉城会 東芝中部支社 はりきゅう治療院クロエ ココカラウィメンズクリニック 南大高町内会 第一生命緑営業 日本教文社 愛知県警備業協会 愛知銀行 エーアイディー グループエスカラデー 名古屋キワニスクラブ 愛知子供の笑顔フォーラム EVERYFOOD 名鉄生活創研 矢作建設工業 愛知県信用農業協同組合 カーブス オサムファーム タキヒョー(株) 山銀ふどう園 みよし保育園 児童福祉の架け橋 保険見直し本舗グループ 三宝出版 Web3マイニング 包む イトウ 名古屋中村法人会 The Music Restaurant ホープヘアー ウッディ おり紙 Violet 中部楽器技術専門学校 エイトチェンジ エイトデザイン 豊明損保センター ジャパンフォレスト グループエスカラデー 濱島興業 大橋製作所 文創 炉ばた焼さとる エコ・ポリス 鳴海教会 寂光山勝鬘寺 ニッセツ 愛知子ども応援プロジェクト 霊友会「ありがとうこだま基金」 エリクシール 名古屋商工会議所 守山商工会 鳴海商工会 有松商工会 聖マリア在俗会 富士ダイス 日本誕生花セラピー協会 圓道寺 東洋通信工業 デンソーグループはあとふる基金 中央有鄰学院ひとりひとりを支える会 ぐるーん東海 桶庄向日葵プロジェクト 滝川 もくもくファーム 日本赤十字社愛知県支部 名古屋オーシャンズ 丸大産業 中部善意銀行 ラグザス 名古屋栄ロータリークラブ 和進館児童ホーム 名古屋中法人会 日本労働組合総連合会愛知県連合会 名古屋ワイズメンズクラブ 名古屋グランパス後援会 名古屋ダイヤモンドドルフィンズ 並矢 ウルフドッグス名古屋 第一生命緑営業オフィス 世界アーチング協会 イシダ総合システム パスタディフランコ 名古屋南ライオンズ 公益財団法人愛知県文化振興事業団 ひろびーファミリー アサヒ飲料 木徳神糧 篠原欣子記念財団

寄付里親はこちらのQRコードから登録  
出来ます。ご協力お願いいたします。



## COLUMN ～正しさを手放してみる～

国と国がお互いの正義をぶつけ合って、その結果、誰かの命が奪われていく…。そんなニュースを見て  
いると、「そこまでして主張しなきゃいけない正義って、一体何なんだろう？」といつも心が痛みます。

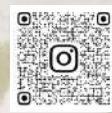
でもこれって日常の子育ての現場でも、同じようなようなことが起きている気がするんです。

例えば、他の親御さんを見て、「ありえない！」と責めてしまったり…。でも相手を否定したところ  
で、そのお家の育児がハッピーになるわけじゃないんですね。きっと、どの家庭にも外からは見えない  
事情やそれぞれの愛情のかたちがあるはずなんです。

「私はこう思うけど、あのお家(国)はあなんなんだ」そんなふうに、人も国同士も自分の物差しを一度  
しまってみれば、大切な命や心を傷つけられることもなくなるんじゃないかなと思います。

正しくあることよりも、見えない背景に思いを寄せること…。

仮に、いつも隣にいる誰かの理解できない姿を目の当たりにしても、  
穏やかな“まなざし”を向けて、静かに寄り添えるような自分でありたいなと思います。



Instagram